

【課程－２】

審査の結果の要旨

氏名 小林小百合

本研究は、グループホームにおいて認知症高齢者に提供される「食」に関連したケアについて、エスノグラフィー法によるインタビューと参与観察を通して、ケア提供者の視点とプロセスを明らかにしたものであり、以下の結果を得た。

1. ケア提供者の「食」に関連したケアの視点を分析した結果、《自分で食べる》、《しっかり食べる》、《食事を楽しむ》、《居心地良く食べる》という4つのカテゴリが生成された。こうした視点は、観察項目としてばかりでなく、ケアの目標や評価の視点としても語られていた。また、ケア提供者は、《自分で食べる》、《しっかり食べる》、《食事を楽しむ》という3つの視点によって、利用者個々についての食に関連した行動を見ており、《居心地良く食べる》という視点では、他の入居者との関係に注目して利用者の食を捉えていた。
2. ケア提供者の「食」に関連したケアのプロセスについて分析した結果、《はじめはよく見て観察する》、《多様な状況を知る》、《状況をみながらケアする》という3つのカテゴリが生成された。
3. ケア提供者は、利用者について、《自分で食べる》、《しっかり食べる》、《食事を楽しむ》、《居心地良く食べる》という4つの視点をを用いて、《はじめはよく見て観察する》ことで帰納的に状態を把握し、ケアの試行錯誤を通して多様な状況下での利用者の反応を踏まえる《多様な状況を知る》というプロセスを重ね、どのような条件のときに、利用者がどのような反応を示すのかという経験を蓄積して《状況をみながらケアする》というプロセスを経ている。こうしたケア提供者の「食」に関連したケアの視点とプロセスについて

4. ケアの視点とプロセスを記述したことにより、ケア提供者が帰納的に利用者一人一人を把握することで、より個別的ケアが提供できるというグループホームにおけるケアの特徴が明らかになった。一方で、こうした帰納的な気づきがケア提供者の個人的観察力に依存するために、観察項目や内容自体の広さや深さがケア提供者によって異なるという危険性も示唆された。また、今回明らかになったケアのプロセスでは、状態の変化が急激ではない利用者に対しては有効だが、状態の変化が急激で、利用者の行動が解釈できない場合は、認知機能や日常生活動作の得点が比較的高くても、ケアのプロセスは有効に機能していなかった。

以上、本論文は、インタビューと参与観察により、グループホームにおける認知症高齢者の「食」に関連したケアについて記述することにより、ケア提供者のケアの視点とプロセスを明確化し、グループホームにおけるケアの可能性と課題について示唆を得た。本研究は、社会的には注目されながら、日常生活の中で認知症高齢者の生活行動に対するケア提供の構造化が明確ではなかったグループホームにおけるケアについて、「食」に焦点化して、その全体像を明確化した点に独創性があり、認知症高齢者ケアの指標、評価、教育等に活用可能な知見を提供できたという点で、極めて実践的に有用であり、学位の授与に値するものと考えられる。